

組織か人間か

連盟大会での感想

同じ志を持つ者が一堂に会することは、若し事情が許すならば、多ければ多い程よい。集まった人達の書いた物などからは、所詮、獲られないその人達の美点や欠点——この欠点こそ我々をしてその人を、真に理解せしむる重要な契機になるのだが——を身をもって総合的に感じ取ることができるとも、その一つの理由です。

殊に今度の大会のように、近代資本主義のチャチな文化的影響なども蒙っていないあはした景勝の地で会することのできたのは、全く二重の歓びであります。この点山鹿君や宿舍の主人夫妻の一かたならぬ配慮のしからしむる処であって、おそらく同志諸君も深く感謝していることだと考えます。

第一日、海を涉って新築の宿舍に着くと館主夫人は、昨日まで平塚らいちょう夫妻がいたという二階の広間に案内された。我々はそこで意外にも満開の巨大な山桜の歓迎に接した。

無味乾燥な汽車の旅と青い海ばかり見なれた私の目には、この裏庭に隠れていた山桜は殊の外に美しく見えた。

疲れにも拘らず、直ぐに議事日程にはいり、綱領の修正、連盟費の増額、アメリカ水爆実験が日本遠海漁業者に与えた惨たんたる被害状況の世界アナキスト紙へのアッピール、各地協の経過報告、国際局活動の経過報告、その他所定の議事を完了。

第二日、近代のわい雑な騒音から解放されて、会議も漸く日程を進め、愈々中心問題の討論に入った頃は、春風堂に充ち、あくまで同志達の気分は清朗であった。が俄然、同志大沢君の「討論テキストの筆者はバクレーニン^{バクレーニン}を自由主義者と規定しているが、一般社会主義史上バクレーニンは無政府集産主義者といわれている。その点を明らかにしてもらいたい」と言う提言によって、雲行きがややしくなり始めた。

本来、討論テキストに使用された「社会理論としての自由共産主義」はブルガリア・アナキスト・ユニオンの「アンケート」を元にして、同志久保君がまとめた物である、と外面上は断言されている。おそらくそうであろう、が而し、その奥底には、思うに近代アナキズム運動の不振の原因、即ち実践行動の極度の不足は一つにかかって、現象的には完璧な指導的理論体系のない処にあると一例えはバクレーニン時代アナキズム運動の股盛さに圧倒されたカール・マルクスがひそかに第一インテラから身を引いて、その哲学体系の完成に努力したことが、取りもなおさず、近代に於けるマルクス主義運動の股盛の最も基礎的な契機になった。

所以を久保君が痛感されたのではないかと考えられる節である。

もし、そうであったとすれば、その意図はまさしく正道であって、吾々は久保君の努力に大いに感謝しなければならない。

しかし、その意図が正しいと言うことと、仕事が正しくなされたかどうかと言うことは全く別のことである。まず第一に、あの「アンケート」には革命期に於ける「戦略、戦術として」と言う意味のサブタイトルが付いていたのに、テキストの「社会理論としての自由共産主義」には、それがはぶかれていた。我々は階級斗争をあくまでも方法論上の問題と考えているが故に、何度も久保君に「アナキズムは階級斗争の理論」であると云うテキストのテーゼを「戦術としてだね」と念を押した。勿論、久保君はそれを肯定した。がしかし、アナキズム関西学派の空気の中には、テキストからも推察できる如く、階級斗争は方法であると共にアナキズムの存在理論でもあると言う、所謂、方法であると同時に存在目的その物であると思惟する弁証法的意図が無意識的に流れ込んでいることが深く感じられる。

若し、そうであるとすれば、何故にテキスト上に於いて、アナキズムの基点をバクレーニン時代に限定したかと云う疑問が生じて来る。

まさか、マルクス唯物弁証法が十九世紀中、前期の自然科学の結論を基盤にして発し、回顧的には成立し得ると云う辻うらでもあるまい。マルクスの場合、マルクスまでは一貫した歴史を持って、ブルとプロとの階級斗争の歴史観が一応は成立した（その後西欧ではプロレ

タリアは質的に変りはじめた。大沢訳「詩とアナキズム」五二頁、五三頁参照。

もし、前述の辻うらを認め、そしてアナキズム運動は回顧的にも展望的にも一層広い視野を持つ、全く斬新な運動であるとすれば、テキストがアナキズム運動をバクーニン時代に限定したことは、歴史のある短い時期にのみ、階級斗争の現象を限定するかの如き印象を与える。

かくてその現象から「アナキズムは階級斗争の社会理論である。」を導き出しても、それはアナキズム社会理論から歴史哲学的基礎を骨抜きにしたことよって、その重量、深度、及び規模に於いて、マルクス理論にすら遠く及ばない物になり下がるのはけだし止むを得ないことであろう。

私見によれば、アナキズムが単なる一科学的社会理論なら、それは医学や植物学と何んら変らない代物になることである。アナキズムはどうしても総合的な挫折的哲学体系をとつてえなければならぬ。

アナキズムを、相互扶助と個の自由とを縫い合わせた深い統一と均衡の中に発見する為、方法として階級斗争を持たねばならないと断定するなら異論はないがなあーと考えていると、まるで符節を合せた如く、若い同志毎原君が相互扶助と階級斗争との関係を問題にし始めた一現ブル的社会組織に於ては、人間の最も深い本能に根ざし、最も生命的な相互扶助は全くとまどいしていると同時に、個人の自由は極度に迫害されている。まず最初にプロレタリア

として個人の自由を斗い取り、ひいては革命にまで持ち込むために、吾々は組織を造り階級斗争に発露するのではないだろうか。若し、マルクス主義者なら一マルクスにとつては「個人」は単なる抽象であつて「階級概念」こそ具体的な実体であるのだから一階級斗争のための階級斗争、即ち、方法であると同時に、存在そのものであると云う考え方は、そのまま生きた現実として歴史に通ずる。吾々はアナキストであるが故に「アナキズムが階級斗争の社会理論」であることの意味は、マルクス主義者の意味とは異つていなければならぬ。

席上で久保君がどんな意見を出したか、うっかりして覚えていないが、否定的だったような感じが残っている。

テキストに於いては、マルクス主義とアナキズムの相違は以下のような言葉で述べられてゐる。

前者は「大衆の役割を悲観的」にむしろ侮蔑的に見ているが故に、強い強権的支配を主張するが、後者即ちアナキズムは大衆の役割を楽観的に善意的に見るが故に、なんらの強権的支配を必要としない。その結果ひたすら、聖者的、戦斗的、創意的、アナキストの出現を期待することになる。偉大なるスペイン革命に於ては、かかる「人間像」が有名無名取りまぜて「組織」の中に数百万ではないにしても十数万人はいた。それにも拘らずスペイン革命は最後にはつぶされた。何故であるか？この最後の問題は此後の我々に課せられた重要問題である。

たしかに、この中の人間像と組織の問題は重要である。議論がはげしくなり始めた。山口君の「これらの問題に結論を出す前、テキスト全体を一まず見ることにしてはどうか」という提案によって、やっと緊張をとかれた。我々は討論を他の問題へ移して行つた。途中なかのきっかけで、又々、この問題点がでてきた。山口君が不意に副島君への質問と云う形で触れて来た。山口君の言葉を正確には覚えていないが「アナキズムは人間像か組織像か」と云うような意味であった。

僕は副島君に「注意して答えてくれ、これは我々にとつても重大問題だから」と言おうとしたが、山口君の意図は判明していたので、副島君が何んと答えるかをジリジリしながらも待つことにした。彼は一寸考えていたが、やがて、にやりと笑つてあっさり、「そりゃ組織の方さ」と云つてのけた。彼は苦勞人である。だが苦勞人も時による。僕は直ぐ発言しようとしたが、果てしてもない論争に持ち込むことをおそれた。会議を割つてもしょうがないという老婆心が発言をひかえさせた。この時ほど僕は自分の精神的怯懦に愛想が つきたことはなかった、僕は椅子の席に變つてぼんやり海を眺めることにした。

僕は一人で考えていた。アナキズムは擯取され、迫害され、つまはじきされ、踏まれ、けられた。生きて血の通つた具体的な個々人の自由な人間像を、所謂、組織論と如何に調和せしむべきかを発見し創造せんとする古今独歩の最も革命的な自由な哲学である。これは単なる人間像でもなければ組織論でもない。と同時に、これは断じて単なる一科学的な社会理論で

なく、この社会理論を抱擁する唯一の政治哲学でもある。人類の未来は一つにこの哲学の実践度にかかっていると……。

その夜、会議も終つて、すっかり落ちついた気分になつたオールド諸君が、まるで廿才代の青年にでも化身したかの如く盛んに昔ばなしに花を咲かせた。

若い諸君には気の毒であった。重い夜の空には星はなかった。

(一九五四)

註記

一九五四年四月静岡県大瀬岬でひらかれたアナキスト連盟大会は、「アナキズムに対する各人各様の見解と立場を明らかにし、連盟組織としての基本的な方向を確立する」ために、日程の半分以上をさいて討論を行った。

討論は、あらかじめ、リベルテール一号に特集した、ブルガリア・アナキスト・ユニオンの論文「社会理論としての自由共産主義」がテキストとして提出された。

それは、「アナキズムが階級斗争から発生したことは議論の余地がない」とし、「それは一つの社会主義学派である。正確に云えば唯一の眞の社会主義または共産主義であり」、前衛組織としての「自然発生論、経験論および有志論のいずれとも違う人民大衆の意識的活動の前衛と考えられる特殊の革命的アナキスト組織の必要を主張する」というもので、大会はその主張の是非を検討しつつ論議をすすめるという方法をとった。

アナキズム十二号は、その大会報告を特集し、討議の内容を掲載すると共に、七名の出席者からの感想をのせた。本稿はその一つとして書かれたものである。